

第99話 (77頁) 町につれていってもらえなかった男の子の話

お父さんが町に行くしたくをしたので、ぼくは、「お父さん、ぼくもつれてって」と言いました。お父さんは「町まで行ったら、こごえ死にしてしまうよ。だめだめ」と言いました。ぼくはちがうほうを向いて、なきだしてしまい、納戸に行きました。さんざんないて、ねむってしまいました。そしたら、ゆめのなかで、ぼくたちの村から細い道が礼拝堂へとつづいていて、その小道をお父さんが歩いているのが見えるのです。ぼくは、お父さんに追いついて、いっしょに町に行きました。歩いていくと、先のほうに、ペチカがもえているのが見えます。「お父さん、あれが町なの?」と、ぼくは言いました。すると、お父さんが、「あれが町さ」と言いました。そうして、ぼくたちがペチカのところまで来てみると、そこで、輪型の白パンをやいています。「白パン買って」と、ぼくは言いました。お父さんは買って、わたしてくれました。

そこで、ぼくは目がさめて、おきあがると、くつをはいて、手ぶくろをして、外に出ました。外では、みんなが、板やそりですべっていました。ぼくは、みんなと、そりすべりをはじめ、すっかりこごえるまですべっていました。家に帰って、ペチカの上にのぼったとたんでした。お父さんが町からもどってきたのが聞こえました。ぼくはうれしくなって、とびおきて言いました。

「お父さん白パン買ってきてくれた?」

「買ってきたよ」と、お父さんは言いました。そして、白パンをくれました。ぼくはだんろから腰かけにとびおりて、うれしさのあまり、おどりだしてしまいました。

「ほほえましくなる話だね。父と男の子の、心の通い合いがうまく描かれている。」

「登場人物も『お父さん』と『ぼく』の二人だけ。舞台設定が極限まで単純化されていて、父と子のやりとりを一層引き立てている。」

「母親や兄弟姉妹もいるだろうに、と考えるのは野暮というものだろう。」

「効果的なキーワードが、白パンとペチカの二つ。使い方が実に巧みだ。」

「まず、白パン。男の子は、白パンのお土産を、いつも心待ちしていた。そして、一緒に連れて行ってもらえなかった今度も…と、夢にまで出てきた。」

「その夢が叶って、男の子は小躍りする。『うれしさのあまり、おどりだしてしまいました』って、雰囲気がよく出ているよ。」

「ロシアでは、普通は黒パンで、白パンには、ぜいたくでおいしい、というイメージがあるんだ。だから、食べたくてたまらなかった。そんな子どもの気持ちが、よく出ている。」

「そして、ペチカ。男の子の夢の中では、燃えているペチカと町、白パンのパン屋さんが一体になっている。」

「ペチカの上では寝ることができ、男の子は遊び疲れて、そこで休憩しようとした。ペチカに上って横になった途端に父親が帰ってきて飛び起きた。気持ちの躍動感が動作にそのまま表れている。」

「ペチカからは、冬の暖かさ、人情の温かさ、ほのぼのとした雰囲気連想されるね。」

「ちょうど冬の寒い時期で、町までは遠い。父親が男の子を連れていけない理由に『こごえ死にってしまう』と言っているのも、諦めさせる方便ではなかった。」

「すねて寝てしまった男の子は目が覚め、外で『すっかり凍えるまで』そり滑りなどで遊ぶ。ここでも、寒さがペチカ、町、白パンと対比されている。」

「男の子は白パンを親に買ってもらったことはあっても、それが手に入る町へは一度も行ったことがない。それだけに、町と白パンが結びついて憧れが強まるというわけか。」

「ところで、男の子ではなくて女の子だったなら、この話は成り立たないのでは？」

「なるほど。女の子だったら、食べ物よりも、ドレスや人形、飾りなどをほしがらるだろうし、そもそも、父親について行きたいなんて言い出さないはずだよ。家で帰りを待っている方が、女の子には似合っている。」

「父と小さい息子の、同性としての関係を考えるうえで、なかなか興味深いヒントが潜んでいそうな気がしてきたよ。」